

銭形平次捕物控

鬻切り

野村胡堂

青空文庫

一

「あれを聴いたでしょうね、親分」

ガラツ八の八五郎は、この薄寒い日に、鼻の頭に汗を掻いて飛込んで来たのです。

「聴いたよ、新造に達引^{たてひ}かしちやよくねえな。二三日前瀧ノ川の紅葉^{もみじ}を見に行つて、財布を掏^すられて、伴^{つれ}の女達にお茶屋の払いまですて貰ったという話だろう」

銭形平次は立て続けに煙管を叩いて、ニヤリニヤリとして居るのです。

「そんなつまらねえ話じゃありませんよ。親分も聴いたでしょう、近頃大騒ぎになつて居る、土手どての鬻まげ切り」

「そうだってね、新吉原の土手で、遊びに行く武家がポンポン鬻を切られるんだってね、——大きい声じゃ言えねえが、『人は武士なぞ傾城けいせいに嫌がられ』とはよく言つたものさ。突き袖かなんかしやがつて、武士たる者が不用心ななりで女郎買なんかに行くから、命から二番目の大おおたぶさ鬻を切られるのさ。八五郎が財布を掏られるのと違つて、こいつは内々溜りゆういん飲を下げて居る奴が多いぜ。なア八」

町人平次——お上の御用を勤めているには相違ありませんが、武士の鬻切り騒ぎには、内々揉手もみでをして喜んで居るのですた。

その頃江戸中の評判になった、この鬘切りの悪戯は、一ヶ月ほど前から始まったことですが、月のない真つ暗な晩に限って、新鳥越から衣紋坂えもんざかにいたる、所謂土手八丁と言われた日本堤で、何者とも知れぬ怪人に襲われ、アツと言う間に鬘節から髻もとどりを切り取られ、ザンバラ髪になって、すごすごと帰る人間が多くなつたのです。

誰が一体、何んの意趣でそんな悪戯をするのか、全く見当もつきません。鬘を切られるのは武家に限り、二本差でないものは、どんなに酔払って居ても、たった一人を通つても、何の障りさわもなく、武士は二三人繋つながつて歩いて居ても、そのうちのたった一人だけが見事に鬘を切られることさえあるのです。

切られた者の話によると、足音も立てずに忍び寄って、恐ろしい手際で抜き討ぬうちに鬚節を払い、サツと風の如く飛去るらしいというのです。中には頭の上を鳥が飛んだように感じたとか、頬をかすめて、一陣の風が吹いたと感じたときは、もう自分の鬚節は切られて、バリりと毛が耳へ下がって来て居るというのです。

その切られた鬚は、幾つかずつ縄で編んで場所もあらうに、五十間の右手の高札場、丁度見返り柳と相對して、曝さらしものにするのです。もとより鬚を切られた本人は来るわけはありませんが、

「あつ、今日は三つだ」

「昨日は二つだった、——切られた奴の顔が見度いネ」

「あれが千になると大願成就だとよ」

「何んの願を掛けて居るんだろう」

指さして笑うのは、切られる心配のない町人共で、武士は苦々しく横眼で睨んで通るのです。

「面白がつて居ちゃ困りますよ。昨日八丁堀へ顔を出すと、笹野の旦那がひどくお困りの様子で、——平次は何をして居るんだ、鬚切りを放つて置くと、八方から文句が来て、大困りだが——とこぼして居ましたよ」

「成程な、考えて見ると笹野の旦那も、二本差に違いはない^{もつと}。尤もあの方は吉原などへフラフラと出かけて、鬚節を切られるような方ではないがね——」

「ところで親分、その鬚切りの曲者は誰だと思ひます」

「それが解らないから不思議だよ、鎌^{かま}いたちや流行風邪^{はやりかぜ}でないことは確かだ——」

錢形平次の智恵も其処から先は何うしようもありません。

「此節^{はび}急に蔓^{はび}こつて来た、町^{まち}奴^{やつこ}や男^{おとこ}達^{ただて}の仕業じゃありませんか」

「それも考えられないことはないが——」

武家の暴慢^{ぼうまん}と無道^{ぼうず}に対して、敢然として立つた江戸の町奴^{ようや}。
放駒^{はなれこま} 四郎兵衛や幡随院^{ばんずい}長兵衛の亜流が、その頃漸く江戸の

町を我物顔に横行して、時々は眼に余る所業もするようになって居たのです。最初はもとより武士階級、わけでも旗本の横暴に対する反抗で、江戸の町人共にやんやと言われたに違いありません

が、それが人気と勢力を得るに従つて、あべこべに町人共の迷惑になつたことも少くないとは言えず、平次が活躍して居る頃の江戸の町奴は、まことに痛し痒しかゆの存在になりかけて居たのです。

「江戸の町奴の中に、あんな腕の出来る奴があるかな」

平次が疑うのはその点でした。

「安宅あたかの弁吉、小人こびと三次郎などはどうでしょう。弁吉は小太刀を

よく使うそうで、仲間では評判の腕ききですよ。小人三次郎は橋

場の家に弟子を取つて、柔術やわらの稽古をして居るくらいで、柄は小

さいが、恐ろしい早業だということだ」

「三次郎の早業と、弁吉の小太刀の腕前を一人で持つていれば出来ないこともあるまい。が——」

平次はこんなことを考えて居るのでした。

二

「お客様ですよ、——お武家様がお二人」

平次の女房のお静、相変らず若くて優しいのが、障子の外から声をかけました。

「両刀が二人か——鬚を切らたのじやありませんか」

八五郎が側から口を出します。

「シツ、黙って居ろ、——お前はお勝手へでも消えるが良い」
「消えるんですか。へエ、行きますよ」

八五郎を台所へ追いやった後へ、身扮みなりの立派な武家が二人、御大家の御使者見たいな尤もらしい顔をして入って来ました。

「拙者はさる御直参大身の用人、大里貫之助と申す者で御座る」
おおさと
 「拙者は佐々見左仲」
さちゆう

「折入つて平次殿にお願いがあつて参つたが、聴き入れては下さるまいか」

打ち上がったような、謙遜けんそんしたような、妙な調子で二人は始めました。大里貫之助というのは四十前後、少し好人物らしいたくま逞しい男で、佐々見左仲はそれより六つ七つ若く、抜目のない商人のような感じのする二本差です。

「どんな事が存じませんが、私は町方の御用を承うけたまわつて居る者で、

お武家方の内輪のことには、立ち入り兼ねますが——」

平次はツイ尻ごみするのです。

「それはわかつて居るが、先ず聴いて下さらぬか、平次殿」

「へエ」

「何を隠そう、拙者の主人、——名前を申上げても差支えあるまい、——どうせ衣紋坂えもんの高札場さくらに曝されて、幾百千人とも知れぬ者の眼に触れた後だ」

「——」

「その主人、青江備前守びぜんのかみ殿には、困ったことに、御髻もどりを失われたのだよ」

「えッ」

「昨日、——散々お諫め申したが、どうしても、久し振りで仲町の様子が見たいと仰しやる。拙者と佐々見氏と、前後から守護を申上げたら、万に一つも間違があるまいと思つたのが手ぬかりであつた」

「——」

「日本堤を編笠茶屋まで行くと、——これから先は町人共でさえ顔を隠す者が多いくらいだから、御身分の方がお顔をさらしては通りにくい。と申しても、まさか借物の編笠をお勧めするわけに行かないから、佐々見氏が用意のため持参した御編笠をお着せしようとする、と」

「ほんの瞬く間の油断であつた。大里氏は前の方にばかり気を取

られ、拙者はまた編笠を持つて前へ廻ったので、殿の後ろは自然空^{から}っぽになった」

大里貫之助と佐々見左仲は、斯う念入りに説明して行くのです。
「その時、他に見て居る者はございませんでしたか」

平次は問いを挟^{はさ}みます。

「編笠茶屋の評判者、——お妻とか申したな——あの美しい娘が、横の方からそれを見て居たと思う。外には人通りも杜^と絶え、生^{あい}憎^く月もなかった」

「で？」

「何やらヒラリと闇の中に動いたと思うと、殿の御髻^{もとどり}は切られて居た。相手の正体はもとより判らず、神変不可思議の早業で、気

の付いた時はもう、曲者の影も形もなかった」

「申すまでもございませんが、其辺をよく御覧になった事でしような」

「見た、——闇の中とは申しても、二間や三間先の物はかすかに見える。編笠茶屋の灯は心細いものであったが、其辺を照して居るのだ。併し後にも先にも曲者の姿は見えず、今切られたばかりの殿の鬚まげも見えない」

「？」

「殿には、そのまま御帰館になったが、以てもつの外の御立腹だ。天下の往来で、武士の髻もとどりを切るとは憎みても余りある曲者だ。草を分けても捜し出して、屹度成敗するようにと、お供の二人に厳命

だ」

「御尤ごもつともなことですが、——若しそれが世上に知れ渡つたとし

たら、御公儀の方は何うなりましたよう」

くるわ

「廓外の事だから、深い御とがめはあるまいと思うが、何んとし

ても世上の嘲弄ちやうろうの口は塞ふさがれない。殿もそれを御心配になつ

て、せめて曲者を青江家中の者の手で召し捕り、屹度成敗でもし

たなら、今まで幾十百人の髻もとどりを切られた方々も、さすがは青江備び

ぜんのかみ

前守様と言われるだろうと、——今ではそれより外に汚名を救

すべ

う術はないのだ」

大里貫之助の素直な調子には、恥辱ちじよくを打ち開ける努力で痛々

しいものさえありました。

三

間もなく平次は、八五郎と一緒に観音様を横目に拝んで、新鳥越から日本堤^{づつみ}にかかつて居りました。

「いよいよ、鬚切りを挙げるつもりですかえ、親分」

此辺まで来ると、仲町の空気が——ドブ臭く酒臭く香って、八五郎の鼻は蠢^{うご}めきます。

「武家の鬚節なんぞ、腐^{くさ}った茸^{たけのこ}ほども有難くねえが、一と晩にそいつを三つも四つも切って落す手際が憎いじやないか。縛る縛らないは別として、俺はその悪戯者^{いたずら}の面^{つら}が見度^{みて}えよ」

江戸開府以来と言われた御用聞、錢形平次は弱気で引つ込み思案の癖に、妙に斯う言つた戦鬪的なところがあつたのです。

「そう来なくちや面白くない」

八五郎はすっかり悦に入つて、揉手などをして居ります。

山谷から三輪に通ずる八丁の土手は、諸大名に命じて築かせた

荒川の水除けで、これを日本堤と言つたのには、いろいろの江戸

人らしい伝説や付会があります。

土手の両側は一段低い町家で、土手の上には、葭簾張りや粗末

な板屋根の、遊客目当ての茶屋が断続し乍ら続いて居ります。明

暦大火後の吉原が、日本橋から此処へ引越したばかりで、まだ

徳川末期の『大吉原時代』の榮華はなく、何となく粗野な淋しい

道でもありました。

「曲者が鬻^{まげ}を切つて逃げ出したとしたら、何処へ行くだろう。闇の夜を選つてやるにしても、振り返つて曲者の姿が見えないというのは変じやないか」

平次は四方の景色を眺め乍ら、土手の上で腕などを拱^{こまぬ}くのです。

「土手の外へ転げ込むより外に工夫はありませんが、道傍の柳は植えたばかりのヒヨロヒヨロで人間を一人隠せそうもないし、所々にある茶屋は、夜つびて商^{あきな}いをして居るか、宵だけで仕舞つて帰るにしても、葭^{よしず}簾張りの見通しだ。猫の子一匹だつて首尾よく姿は隠せませんよ」

「そう言つたものかな」

平次は土手の両側を覗いたりして居ります。

「変な坊主が居ますよ、親分」

八五郎は柳の下、小汚ない乞食坊主を指さしました。

「土手の道^{どうてつ}哲の真似事さ——日本堤^{づつみ}は昔から乞食坊主の多いところだよ」

平次は懷中を捜して青錢を二三枚掴み出すと、乞食坊主の鉄鉢^{てつぱ}の中に入れてやりました。

「南無、南無、南無」

乞食坊主は何やら口の中でブツブツ言つて居ります。五十前後、或は六十近いかも知れません。何を食べて生きて居るかわかりませんが、骨と皮ばかりの青黒く乾^ひからびた身体を、羊羹^{ようかん}色にな

つた破れ御衣ごろもに包んで、髯だらけの顔、虫喰むしくい頭、陽に焦やけて思
いおくところなく真つ黒になつた顔を少し阿呆あほうたらしく挙げて、
意味もない念仏やらお経やらを、ブツブツつぶやくと言つた世に
も情けない存在です。

心も空に、吉原へ飛んで行く遊治郎ゆうやろうの中に、たまたま諸行無
常とか、色しき即是空そくぜくうとか言つた後生氣を出して、此乞食坊主の鉄
鉢に、小錢を投り込んで行く人間も、稀まれにはあることでしょう。

「少し訊き度いことがあるんだがな」

「へエ」

自分の前にしゃがんだ、大枚十二文の大檀那おおだんなの顔を、乞食坊
主の鑑かん哲てつは、腑に落ちない顔で、ぼんやり見上げるのです。

「近頃此土手で、変なことがあるそうだが、お前は知って居るだらうな」

「へエ？」

「武家の鬚を切る曲者のことだよ」

「へエ」

「此土手に住んでいるお前が、その曲者を見ない筈はないと思うが、どうだえ」

「へエ、——それらしいのを見ないわけじゃございませんが」

「それを聴き度かつたんだ。その鬚切りの曲者は、どんな野郎だ。

若いかな、年寄か、身扮は、——？」

「それを言うと、私は殺されるかも知かりませんが」

「えッ？」

乞食坊主の言葉はまことに予想外でした。

「でも、人助けのために思い切つて申上げましょう。私はもう此処から引揚げて、もう少し収入みいりのある四宿の何処かへ行き度いと思つておりますから」

「？」

「鬚切りの曲者は、お武家でございますよ、——立派なお武家で、四十五六にもなりますか、背の低い、少し跛足びっこですが、恐ろしい体術でございます」

乞食坊主の鑑哲の言葉は恐ろしいほどはつきりして居りました。
「それは有難い、宜い話を聴いた、——八、跛足で背の低い体術

の名人というのを君前は知って居るか」

「橋場に町道場を開いて居るたわらうもん俵右門先生そつくりじやありませんか」

んか」

「フーム、評判の良い先生だな」

「あの人は鬚なんか切りそうもありませんね」

「ところで——」

平次はまた乞食坊主の方に顔を向けました。

「ヘエ、ヘエ」

「その鬚切りの曲者は、——すえもの据物斬の名人だろうが、鬚を切ら

れた武家が、振り返っても姿は見えないそうだ。何処へ逃げるかお前は知ってるだろう——どんな上手な手品でも樂屋から見れば

種も仕掛けもわかるものだ」

「土手の下へ転げるように逃げ込みますよ」

「そんな事が出来るかな」

「其処が体術の名人で」

「有難う、それだけ聴かして貰えば大助かりだ」

平次は乞食坊主に丁寧過ぎる礼を言つて、小粒を一つ、鉄鉢の中へ追加してやりました。

「橋場の俵右門とわかれば、あとは調べにも及ばないでしょう。

引返して道場へ踏込みましょうか」

「威勢は良いが、俺とお前と二人でヤットウの道場へ踏込んだところで、弱い武者修行ほどの働きもむずかしからう。まアまア黙

つて俺に付いて来るが宜い」

「へエ」

四

其処から直ぐ、左手に軒を並べて、編笠あみがさ茶屋というのがあります。其処で編笠を借りて冠つて、厄介な荷物は預けて、吉原へ繰り込むのですが、渋茶しぶちや一碗の設備もあり、店には美しい娘などを置いて、客を呼ぶにおろそかはありません。

「御免よ、お前一人か」

柳屋というのへ八五郎が長んがいあご頤を覗かせると、

「あら八五郎親分」

店火鉢を離れて立つたのは、お妻という土手一番の評判娘でした。十九というにしては少し老けて居りますが、地味な衿にこればかりは燃えるような赤い片かただすき襷、いずれかと言えば淋しく品の良い顔立ちで、口の悪い素見ひやかしの客などは、「へエ、こいつは大した玉だ。昼三の太夫よりは此方が光って居るぜ」などと、お座なりを言つて通り過ぎるのが度々のことです。

「お妻坊、相変らず綺麗だなア、お前が土手に居るんで、仲町は火の消えたようだって言うぜ」

「あら、親分、御冗談ばかり」

打つ真似をした手をそつと引込めて、パツと赤くなると言つた、

初心^{うぶ}さがたまらない魅力でした。

「ところで、今日は錢形の親分をつれて来たが昨夜の鬚切り的一件^{くわ}を詳しく話してくれないか」

「でも、私、何にも知らないんですもの」

「知ってるだけで宜いよ。三人の武家に気のつかないことでも、側に見ていたお前には気のついた事が沢山あつた筈だ」

平次は八五郎の後ろから、穏かな調子で——が退^{のつびき}引ならぬ問いを投げかけました。

「あの、何んにも気が付きませんが——」

三人の武家に見えないことが、この十九の娘に見える筈もあるまい——、平次はフトそんな心持にもなりましたが、

「だが、鬚切りは、よく此辺に出るようだ。二度や三度はお前も騒ぎを見て居るだろう」

「――」

「昨夜の青江備前守様は、何処に居たか、私を其処へ立たして見てください」

「此辺でございました、――此方こつちを向いて、え、そんな具合に」

「二人の御家来は――八五郎、お前は大里さんと佐々見さんの二た役勤めるんだ」

「へエ――」

お妻は心得て八五郎を平次の前に立たせると、商売物の編笠などを持たせて、その時の恰好をさせるのです。

「二人の御家来は、店に背後うしろを見せて居たのだな。殿様の顔の前には編笠があつた——ところでお前は何処に居たのだ」

「此辺でございました」

お妻は店先——二人の家来から少し離れて立つて見せました。

「灯は斜ななめうしろ後から射して居る筈だ、——するとお前の眼には、

曲者の姿が見えなければならないが」

「そう言えば、何にかチラリと見たようにも思いますが」

「若い眼で、これだけの灯で、見えない筈はない——遠慮することはない、曲者の様子を言つて見るが宜い」

「——」

「お前は怖いのか、無理もないことだが、世上の迷惑には代えら

れない。相手はどんな人間であろうと、お前には指も差させないつもりだ。知ってるだけの事を言うが宜い」

平次の言葉は条理を尽します。

「若い男でした——背の高い」

「武家か、町人か」

「チラと見ただけで、よくはわかりませんが、遊び人風の」

「そして何処へ逃げたのだ」

「土手の下へ、転げるように逃げました。でも、その辺は真っ暗で、夜分は覗いても何んにも見えません」

「切った鬘は、曲者が拾って行つたのだな」

「え」

「そんな隙すきはない筈だが――」

それは重大な疑問でしたが、お妻も覚おぼつか束なく、可愛らしい眼をしばたたくばかりです。

「親分」

「何んだ八、袖なんか引つ張つて」

「曲者は安宅あたくの弁吉ですよ。やくざ者だが小太刀こだちの名人で、自分の腕に慢じて、武家の鬚などを切つて見度くなつたんですね」

「先刻は俵右門とかいうヤツトウの先生だと言つたじゃないか」
「へエ」

平次と八五郎は、お妻の茶屋を出ると、衣紋坂えもんざかを下つて、五
十間を門かどなみ並に、大門前までいろいろの事を訊ね廻りました。鬚

切りの曲者の噂は大変ですが、まことに神出鬼没きぼつで、誰も正体を見たという者はありません。

「驚きましたね、親分。こんなわけもない事が、どうしてわからないんでしょう」

「思いの外企たくらみが深いよ、高札場へ行つて、切られた鬣を見せて貰おう」

二人は高札場の番屋へ寄つて、切られた鬣を見せて貰いました。浅ましくも竹たけぎる筈へ、醜みにくきい茸のこのように入れたのが、ざつと二十もあるでしょう。

「不思議なことにこの紛失物ふんしつものばかりは誰も取りに来ませんよ」

番人はそう言つて笑い乍ら、真つ黒な鬣をかき廻して見せます。

「尤も、そいつは返して貰つても、焼継ぎも糊付けもきかねえ」

「黙つて居ろ、八。少しは切られた者の身にもなつて見るが宜い」

「へエ」

「ところで、高札場へ曝さらした髻で、名前を貼はり出されたのは。青江備前守様たった一人だね」

「そうですよ、不思議なことに、あとはどれが誰のか名前はわかりません」

高札番屋の番人はこう言うのでした。

「面白いな、八。下つ引を六七人集めて、安宅あたかの弁吉と小人こびとの三

次郎と、俵右門とを見張らせてくれ。昼は要らない。夜だけだ。

三人は何処へも出ないのに、髻切りがまだ続くようなら、考え直

さなきやならない」

「親分は？」

「俺は青江備前守の身持を調べ抜くよ、——それからお前には外に頼み度いことがある。耳を貸せ」

五

それから五日目の朝、

「わッ、驚いたの驚かねえの」

相変らずの調子で飛込んできたのはガラツ八の八五郎でした。

「何うした、見せろ、鬚は無事か」、

平次も釣られて、八五郎の鬚まげぶし節に眼をやります。

「鬚は無事ですがね、驚いたの何んの——全く胆きもをつぶしましたよ、——親分の言い付け通り、損料で紋付と大小を借り出し、侍姿に化けて三晩続け様に土手から仲町へそそつたが、鬚切りは姿も見せねえ、——考えて見るとあつしの柄が少し意氣過ぎた」

「馬鹿野郎、宜い氣のものだ」

「それからグイと野暮やばに作った。本場の浅黄裏あさぎうらの拵こしらえで編笠茶屋のあたりをウロウロして居ると、来たね」

「——」

聴いて居る平次もツイ固唾かたずを吞みます。

「足音も何んにも見えねえ、サツと太刀風が襟をかすめたと思う

と、鬘はポロリと落ちた——気合も何んにも掛けずに、いきなり背後からピカリとやるんだから、凄いなア、親分」

「待てよ、八。鬘がポロリと落ちたと言ったが、お前の鬘は切れもどうもしないじゃないか」

「其処が計略けいりやくだったんで」

「？」

「あつしの真物ほんものの鬘は髻たばの中へ突っ込んで、叔母さんから髻かつらの古いのを貰って、付け鬘を拵えて頭の上へ載つけて行きましたよ、
——さすが真に曲者も偽物にせものの鬘とは気が付かなかった」

「ハッハッハッ、そいつは上出来だ」

平次も思わず笑ってしまいました。

「どうです、うまい工夫でしよう」

「工夫は良いが、曲者の姿でも見窮めたのか」

「何んにも見やしませんよ。口惜しいが、サツ、ポロリだ。あわてて其辺中捜し廻ったが、犬の子一匹居ねエ。ありや魔物ですね、親分、——その癖くせ今朝見ると、あつしの付け鬘はちまきが、麗々しく高札場にブラ下がって居るじゃありませんか、その上青江備前守この方二度目の貼り紙だ、——御用聞八五郎殿の鬘——とね」

「フーム」

「あんまり癪しやくにさわったから、高札場の石垣の上に立って、大きな声でやりましたよ、——はばか憚り乍ら八五郎は錢形平次の子分だ。素直に鬘などを切られる人間じゃねえ。嘘だと思ふならこれを見

ろ、此通り——とね」

「だが、容易でない相手だな、——ところで、見張りを付けて置いた三人はどうした」

「安宅の弁吉も、小人の三次郎も、俵右門も此四五日は神妙に家に居て、一寸も敷居の外へ出ませんよ」

「フーム、いよいよむずかしい、今度は俺が鬣を切られる番かな」

「親分が侍姿で出かけるんですか、——鬣かつらの古いのを搜して来ましょうか」

「そんな術ては二度きくもんか」

「所で、青江備前守の方の調べはどうです」

「あの殿様は身持がよくないな。鬣を切られた噂は、公儀のお耳

にも入ったようだから、いずれ八千五百石の大身代は持ちきれまいよ」

「へエ」

「何人^{めかけ}となく妾を入れて、ひどい目に逢わせて居る。嫉妬^{しつと}が激しくて、ケチで、無道で、薄情だから手のつけようがない。中には自殺したのも、責め^せ殺されたのもあるということだ」

「それじゃ鬻で仕合せで、首を切られても不思議はありませんね」

六

其晚錢形平次は、侍姿に化けて、土手から衣紋坂をブラリブラ

りと歩きました。

「意氣過ぎますぜ、親分は。まるで島田重三郎か白井権八の廓くるわ通がよいという図だ」

「馬鹿、お前は顔を出さない方が宜い、鳥越の勘六の家で待つて居ろ」

うるさく跟いて来る八五郎を追つ払つて、平次はもう一度編笠茶屋の方へ引返します。

「精が出るな。斯こう暗くなつちや、貰いもあるめえ」
立止ったのは、乞食坊主の鑑哲かんとつの菰こもの前でした。

「おや、親分さんで、妙みなりな身扮で？」

鑑哲は木乃伊ミイラのような身体を起して、薄黒い顔でふり仰ぎまし

た。杖にした青竹を力に上半身をささ支えるのが精一杯です。

「なアにお茶番だよ、誰にも言うな。ところで、もう亥刻よつ（十時）
だろう。店を仕舞っちゃどうだ」

「へエ、でも、本当の貰いはこれからで御座います。素見客ひやかしきやく

は後生気はありませんが、本当に遊ぶ方は、いくらでも恵んで下さいます。へエ、南無」

乞食坊主はブツブツ言い乍ら、思い出したように小さいざる箆かね鉦などを鳴らすのです。

平次はそれから衣紋坂へ、幾度歩いたことでしょう。鬚切りのおび噂まぼらに脅えて、更けると人足も疎になり、僅かに威勢の良い四つ手が、思い出したように宙を飛んで来ます。

丁度五回目、編笠茶屋を過ぎて、衣紋坂へ近くなつた頃でした。と、ある空茶屋の軒下を廻ると、不意に、

「――」

サツと太刀風、平次の頭にカチと鳴つて、あとは不気味に静まり返ります。

たちかぜ
太刀風と一緒に、平次の右の手は激しく頭上に動きました。が、別に土手の下を覗くでも、四方をキョロキョロするでもなく、そのまま引返して新鳥越の方へ――

「親分」

道でバタリと逢つたのは、八五郎のあわてた顔でした。親分の平次を案じてやって来たのでしょうか。

「出たよ、八。兎も角勘六の家へ引返そう」

二人は其処からツイ鼻の先の下つ引勘六の家へ引返しました。

「おや、銭形の親分」

「挨拶は後だ、——あかり灯を見せてくれ」

平次は勘六の持出した手燈の側へ、右手に持って居た三尺あまりの継竿つぎざおの先を出しました。竿の末端に厳く縛った鰻針うなぎばりのたくま遅しいのに、何やら黒い巾の千切れたのが引つ掛けて、少しばかりですが、血さえ付いて居るではありませんか。

「親分、これは？」

「曲者の着物だよ、——少し釣針つりばりで引つ搔いたかも知れない。直ぐ行つて見よう」

「何処です、親分」

「色の褪^さめた墨^{すみ}染^{ぞめ}の木綿を来て居る人間は土手に一人しか居ない筈だ」

「あッ、あの乞食坊主？」

平次と八五郎と勘六は、疾^{しつぷう}風の如く土手を引返しました。何人にも知らずに、菰^{こも}の上で鉦^{かね}を叩いていた乞食坊主の鑑哲は、大骨を折らせ乍らも、三人の手で取って押えられました。

「親分、聴いて下さい。私は逃げも隠れもしません——これには深いわけがある」

縄を掛けられ乍ら、乞食坊主の鑑哲は声を絞りました。

「よし、そのわけは俺も聞き度い、此処で言うが宜い」

勘六の家へ引立てて来ると、平次は此坊主の言い分を聴いて見度くなつたのです。

「私はこれでも武士の端くれだ。が、二本差がいやになつて、こんな姿になつてしまつたのだ。そのわけは、主人筋の青江備前びぜんの守かみに、娘を人身御供ごくう同様の妾めかけに取上げられ、二年経たないうちに、氣に入らない事があると言つて、なぶり殺しにされてしまつたからだ。人の良い娘は化けて出るほどの氣力もないらしいが、親の私は腹の虫が納まらない。青江備前守が時々吉原へ遊びに来ることを知つて居るから、あの高慢な頭の鬣を切つて、青江の家を取潰とりつぶさせる氣になつたのだ。——他の罪もない武家多勢の鬣を切つたのが悪いというのか、ハッハッハッ、そいつは平次親分

にも似合ない言葉だ。吉原へ来て売女に現うつを抜かす二本差などは、此世にあつて益のないものだ。祖先の手柄はで高禄を喰み、ノラリクラリと遊んで暮し、その上女郎買とは何んというタワゴトだ。そんな武家の鬻うを切り払つて、何処が悪い」

乞食坊主の鑑かんてつ哲の気焰は、まさに虹の如きものがあります。

「よいよい、人を害あやめたわけではないから、今度だけは知らぬ振りをしてやろう。その代り、こんな人騒さわがせは二度とはならぬぞ。宜いか、鑑哲」

「フーム」

「解つたら帰れ。娘が心配して、外で待っている様子だ、——土手に居てはろくな事があるまい。巢を変えろ、宜いか」

「有難い、——さすがは錢形の親分だ。それじゃ、土手ともお別れだ。八五郎親分、勘六親分、長い間世話になったなア」

かれき枯木のような鑑哲が、ヒヨイヒヨイとお辞儀をして外へ出ると、

其処にはシヨンボリ待つて居た若い女が一人、

「まア、父さん、無事で」

飛付くように鑑哲に取りすがったのは、編笠茶屋のお妻でなくて誰であるものでしょう。

×

×

それを見送つて、真つ暗な道を山の宿の方へ辿り^{だど}乍ら、

「変な捕物でしたが、あのお妻が乞食坊主の娘とは気が付きませんでしたよ」

八五郎は口を切ります。

「切った鬘を拾ったのがお妻さ、——此間鑑かんてつ哲とお妻の二人に訊いた時二人の見たという曲者の様子が、まるつきり違つて居るので、こいつは臭いと思つたよ」

「釣つりざお竿で捕物は始めてですね」

「曲者はどうしても姿は見せないと言うから、編笠茶屋や空茶屋の屋根の上から、通りすがりの武家の鬘を切るのだと解つたよ。それから継つぎひ竿の一番先の細いのを用意して、太刀風と一緒に頭の上をかき廻したのさ」

「それにしても、親分も鬘は無事じゃありませんか。付け鬘でも用意したんですか」

「そんな間拔けたものを用意するものか。俺のは女房の銀簪ぎんかんざしをかりて、足を曲げて髷の中へ仕込んだよ。切られるとカチリと言ったが、毛は少し削そげたかも知れない」

「成程そいつは気が付かなかった、——尤もつとも気が付いても、こちらには簪かんざしをかしてくれる女房もいないが」

「そのうちに良いのを見付けてやるよ」

二人は他愛もない事を言い乍ら、軽い心持で家路へ急ぎました。

青空文庫情報

底本：「橋の上の女 —— 銭形平次傑作選※」[#丸2、1-13-2]」
潮出版社

1992（平成4）年12月15日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋新社

1947（昭和22）年12月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：結城宏

2020年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

鬻切り

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>